

主日礼拝

2024年2月11日（日）

題 「本人にお聞きください」

テキスト：ヨハネによる福音書9章13～23節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書箇所は先週の続きです。生まれつき目の見えない人をイエスが癒して目が見えるようになるという出来事を知ったユダヤ人たちは、盲人であった人をユダヤ教のファリサイ派の人々の所へ連れて行きました。

そこでファリサイ派の人々が事情を調べることとなったのです。

聖書から学びましょう。

◆ファリサイ派の人々、事情を調べる

「13:人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れ

て行った。 14:イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。」とあります。2000年前のユダヤ教には、大きく言えば二つの勢力があったのです。ファリサイ派とサドカイ派でした。ファリサイ派は、今日の旧約聖書の最初の創世記から出エジプト記、レビ記、申命記そしてヨシュア記のモーセの名によって記されていた聖書のことばを大切にする人々でした。彼らは聖書のことばを大切にして宗教生活を送っていました。

特に生活の中で、モーセがシナイ山に登り、そこで神から聞いた、10の戒め、いわゆる「十戒」を大切にしていました。十戒は出エジプト記の20章2節～17節（p126）に記されています。その中にある4番目の教えが、安息日に関する教えでした。そこには次のように記されています。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜もあなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」と。これがユダヤ教徒の大切な教えで今でも守られてるのです。安息日は今日の土曜日にあたりますが、厳密には金曜日の日の入りから始まります。ユダヤの一日は日の入りから始まるとされるのです。闇から光の朝を迎えるといことです。

今日の聖書に関して言えば、イエスが生まれつきの盲人を癒されたのが安息日であったので、律法つまり決まりの専門家であった特にファリサイ派の指導者たちは問題を感じたのです。そこで彼らは、目の見えるようになった人に、「どうして見えるようになったのか」と尋ねたのです。目の見えるようにな

った人は「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」と答えました。

当時、治療行為は、労働であり、仕事とみなされ、安息日に行ってはならなかったのです。イエスが盲人に目を癒したことに對して、ファリサイ派の中に分裂が生じました。それが16節に記されています。

16:ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。

イエスは神の教えに従ってないので、神からの人ではないという人がいたり、どうして神に背く人が、生まれつき盲人の人の目を開けるようなことができるだろうという人たちもいるありさまでした。

そこで、人々は盲人であった人に再び問います。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」と。旧約聖書にも出てくる。イザヤやエレミヤのような神の言葉を人々に伝えた預言者、「あの方は預言者です」と言ったのです。

そこで人々は、この人の両親を呼び出し出したのです。

18:それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということを信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、

19:尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」と問い詰めたのです。それに対して目を癒された人の両親は、

20:「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。21:しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」この時、両親はイエスが彼の目を癒したということは語っていません。それは、どうしてでしょうか？聖書は、イエスに目を癒してもらった人の両親はユダヤ人たちを恐れていたからだ、と言っています。

「22:両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、街道から追放と決めていたのである。」とあります。

わたしは、この時の両親の複雑な心を思わされました。わが子を癒してくれたイエスに驚きと感謝の思いもあったでしょうが、自分たち家族の身を守った

のです。両親は、イエスをかばいいつも、自分たちとは関係ない者とし家族の自分たちの身を守ったのです。

当時の事情があるようです。**ユダヤ人たちの地域・社会の生活は、ユダヤ教の会堂を中心とする社会でした。**

会堂から追放するということは、地域の人々が、申し合わせて、のけ者にし、仲間外れ、遂には地域共同体から追い出されること、村八分にされるということで生きて行くことが困難になるということです。生まれつき目の見えなかった人の両親にとっても家族にとってに重大な問題です。日本でも町内会との関りで苦労したり、いろいろ問題になったりすることはあります。

そこで、あくまでわたしの推測ですが、

23:両親が、「もう大人ですから、**本人にお聞きください**」と言ったの

は、そのためである。」これもやむを得なかったのかもしれないと思うのです。しかし、この後の聖書の個所で明らかになりますが、**直接イエスに癒された目の見えなかった人にとっては救い主・メシア・イエスとの決定的な出会いだったのです。**

24 節以下を読むと、生まれつき目の見えなかった人は、イエスが神から来た人であるとユダヤ人たちの前で語りました。34 節には、彼はユダヤ人の共同体から追い出されたことが記されています。でも彼は、イエスに対して「主よ、信じます。」と告白して新しく生きる者となって行きました。両親が言えずに隠したことと、イエスに出会い目を開けてもらったこの人はイエスとの出会いを告白したのです。それができたというよりも、そうせずにはおれなかったのだと思います。それほどまでに、イエス・キリストとの出会いは、人生を変える、すばらしい喜びの出会いなのだとしたことだと思わされます。

ここにいる私たちも聖書を通してイエスにより神の愛を受けた者たちです。神の霊、神の力なる聖霊を受けつつ愛なるイエスを勇気を持ってまわりに伝える者たちとされることを願い祈ります。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。